

まちの情報と想いを発信する

T大学：経済学部・現代経済学科・3年

期間：令和2年9月8日～11日（4日間）

私は将来、地元の魅力を発信する仕事に就きたいと考えています。なぜならば地元の魅力を発信することで、地域活性化に貢献したいからです。発信するといっても行政や観光など様々な職業がありますが、今回は地域に密着しているケーブルテレビの制作部のインターンシップに応募することにしました。

インターンシップに参加する前は、ケーブルテレビとは、地域のテレビ番組を制作する会社という漠然とした知識でしたが、四日間の研修をさせて頂いたおかげで業務内容をしっかりと知ることができました。その中でも意外だと感じたのは、ケーブルテレビは放送局でありながらケーブルの契約を取る必要があるため、番組を作る制作部だけでなく営業部や技術部があり、業務内容が多岐に渡っていることです。

また、研修中に度々感じたことは、社員の方々の正しい情報を届けようとする強い想いです。番組に出演されている方の意図を正しく視聴者に伝えられるように、現場での打ち合わせや取材での確認、原稿や編集の仕方、放送前の確認などが常に入念に行われていました。

また、特に印象的だったのは表題にもある通り、何事にもまちの情報と想いを発信することをもって行動されていたことです。入念な打ち合わせや細やかな確認をすることが正しい発信につながりますが、それらに加えて、まちの人々とのつながりを大切にされているのを感じました。例えば、取材先では、挨拶と撮影をさせていただけることに対する感謝の気持ちを仰っていました。そうすることで取材を受けてくださる方との関係がスムーズになり、結果的により良い情報を引き出せることに繋がっていると捉えました。このような対応を心掛けることで、まちの人とのつながりを深くし、まちの情報や想いを発信できるだけでなく、市民皆で作るまちづくりにつながっていくのではと感じました。

また、カメラなどの重い機材を運んだり、時には長時間に及ぶロケがあったりなど、ケーブルテレビの制作部は体力的にも大変な仕事です。しかし、仕事をされている皆さんはそんな大変さを感じさせず、精力的に仕事をされていました。やはりここでも発信する側の社員の皆さん自身に誇りとやりがいを感じました。ケーブルテレビは、まちの皆さんに寄り添ってまちのために発信しているという自覚を持たれていることが良い発信ができていることに繋がっていると思いました。

今回四日間と短い期間ではありましたが、非常に貴重な体験をすることができました。冒頭にも記述しましたが、“地元の魅力を発信する”まさにケーブルテレビは、それを担っているのだと改めて感じることができました。今回体験したことを、今後の学生生活さらに社会人になった時にしっかりと生かしたいと思います。

最後になりますが、研修に参加するにあたって、ご多用中にも関わらずご指導していただいた皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

放送業界への魅力が増した5日間

K大学：経済学部・経済学科・3年

期間：令和元年9月2日～6日（5日間）

私はこのインターンシップ研修に参加したことで、ケーブルテレビ局の仕事の流れを理解しました。研修前はテレビ業界に興味はありましたが、その仕事内容については無知の状態でした。そのような状況でこれから就職活動を行うことに不安を感じていたため、今回の研修はとても貴重な体験になりました。

5日間の研修では取材に同行して、その様子を見学したり、実際にカメラなどの機材に触れ、撮影を行ったりしました。撮影時には映したいものに対してカメラの位置や角度を変えると、映したいものの見方がかわったり、光の当て方によってきれいな映像を撮ることができたりしました。私たちが普段見ているテレビの映像は、こうした工夫によって視聴者の心を動かしているのかと思うと、興味がさらにわきました。また、インターンシップ研修中の姿を、研修生によって撮影し合い、その撮影した映像を編集し、ニュースで流す一本の映像を作成しました。作成過程のなかで、読む側が見やすく、そして読みやすい原稿の作成方法や、作成した原稿に沿った映像の編集方法を学び、一つの映像を作る流れを理解しました。撮影の時にはたくさんの角度から撮影を行いましたが、実際にできた原稿は短く、それに合わせて撮影した映像も編集して短くするため、実際に使用した映像はとても短くなりました。1時間程度かけて撮影したものは、放送時には1分から2分に凝縮して伝えなければならぬため、どの映像が視聴者に伝わりやすいかを厳選することに難しさを感じました。

このインターンシップ研修を通して、研修前よりもテレビ業界における仕事内容について理解が深まりました。私のケーブルテレビ局に対するイメージでは、カメラマンやアナウンサーなどが専門の仕事を持ち、それぞれが仕事を分担しながら映像を作成しているのかと思っていました。しかし、実際には民放テレビ局のように、アナウンサーやカメラマンなどのような専門の仕事のみを行う人はいないため、一人ひとりが取材や撮影、映像の編集作業、原稿作成を行い、なかにはそれに加えてアナウンサーを行い、一人ひとりがたくさんの仕事をこなして、映像作成を行っていました。

なので、ケーブルテレビ局では放送する映像を収録するまでの過程に多く携わることができ、私はそこに魅力を感じました。また、私が研修前に想像していた以上に、ケーブルテレビ局は地元住民にとって、地域の情報を知る手段として愛されていました。番組のロケに同行した時には、地域住民から「いつも見てるよ」などの声かけがよくあり、私は5日間だけの研修でしたが、不思議とうれしい気持ちになりました。

このインターンシップ研修を通して、ケーブルテレビ局で働くことに対して、とても魅力的に感じるようになりました。そして、コミュニケーションの大切さを改めて実感しました。このインターンシップでは、放送制作部の方々から就職活動に向けてのアドバイスや、社会に出る前に大学生活中に行うべきことなどたくさんの話を聞くことができました。これからも、社会で働いている人などとコミュニケーションをとり、自分自身を高めていこうと思います。

笑顔の裏にある努力

K S 大学大学院：国際環境工学研究科・1年

期間：平成30年9月4日～10日（5日間）

私は将来就きたい仕事を考えたとき、すぐに浮かんできたものがあります。それは人々を「笑顔」にする仕事です。日常生活で人が笑顔になる場面を想像すると、最初に、笑いながらテレビを観ている姿が浮かんできました。近年は一家に一台テレビがある時代であり、テレビから流れる映像や音を通して、子供からお年寄りまでみんなが情報を得たり、笑顔になることが出来ます。このように、人々を笑顔にするテレビから流れてくる映像や音がどのように作り出されているのか実際に自分の目で見てみたいと思い、今回、株式会社Iのインターンシップに参加させていただきました。

初日は番組制作の見学を行いました。子供からお年寄りまでわかる言葉の取捨選択、映像の編集、テロップのデザインや位置など本当に細かい部分まで気を配っており、「視聴者にとってわかりやすく、また観たいと思ってもらえる番組を作る」という一つの目標に向かって、制作課の方々全員が一生懸命取り組んでいました。また、一人が取材、撮影、映像編集、原稿作成まで一連の業務を行っており、時には午前中に取材してきたニュースをその日の夕方に放送することもあるということを知り、仕事の質に加えスピードも必要であることを学びました。

二日目以降は取材への同行や、テロップの作成、キャスター体験を実際に行いました。取材では現場の雰囲気や人の真剣な表情や楽しそうな表情をカメラで撮影したり、インタビューを行いました。撮影では重たいカメラをもって走り回り、インタビューでは話し手の気持ちを引き出せるような質問をするなど様々な努力がなされていることを実際に感じる事が出来ました。テロップ作成では必要最小限の情報を視聴者にわかりやすく、なおかつ映像の邪魔にならないよう、デザインや位置を工夫しながら作成しました。またキャスター体験では、キャスターさんの緊張感はもちろん、キャスターさんと制作課の方々との連携プレーの重要性を身をもって感じる事が出来ました。

インターンシップに参加する前までは正直、今回体験した情報・通信業は、現在大学院で行っている研究とはあまり共通点はないと思っていました。しかし、今回のインターンシップを通して、研究との共通点を二点発見しました。一点目は自分の情報に自信をもつことです。大学の研究においてエビデンスが必要であるように、番組で使用する言葉一つ一つにも根拠が必要であり、私たちが普段気にしない細かい部分までしっかり調べたうえで、自身をもって情報を発信しておられました。二点目は努力を怠らないことです。地道に日々実験をして結果を出す研究と同様に、番組制作でも印象に残る映像編集、原稿作成などを他の番組を観ながら学んだりしており、私たちの笑顔の裏には制作課の方々の努力があることを実感しました。

5日間という短い期間でしたが、大学の研究では学ぶことのできない貴重な体験をすることが出来ました。この経験を今後に関し、人々を「笑顔」にするために努力できるような人間になりたいと思います。

目的意識をもって

K大学：国際文化学部・国際文化学科・2年

期間：平成29年8月22日～26日（5日間）

大学2年になっても未だに働くということに実感が持てずにいた私は、仕事についてより深く考える機会にしたいと思い、今回インターンシップ体験をすることにしました。高校3年間で伝えることの難しさと楽しさを放送部にて学んだため、放送を仕事としているところであれば、それが仕事になるとどう変わるのか・学生生活と社会人の違いは何かを学べるのではないかと思います。ラジオ局のインターンシップに参加しました。

それまでは、「伝える」ということは、調べる・まとめる・発信する・考えてもらうことだと学んでおり、私自身もそう考えてきました。しかし、伝えることを仕事としている方々を見ていて分かったことは、そこには「動いてもらう」ことも含まれるべきであるということでした。人に何かの情報を届ける際には、ただ一方的に面白い・楽しい話をするよりも、それを聞いて何かをしようと思わせることが重要であるようでした。実際にコミュニティFMはその地域に密着した情報を届けており、ラジオの生放送を通して防府のまちを元気にすることを目的に活動されていました。

ラジオ放送を通して、企業・店・団体とそれらの客（リスナー）の間に入ることで二者を近づけ、町に動きが生まれます。そしてそれは、町を元気にすることにつながります。そういったお話を聞く中で、また実際に生放送で防府の話がされているのを見る中で、社員やパーソナリティの方々がいかにご自身の仕事に誇りをもっているのかが伝わりました。コミュニティFMの役割を理解し、そこに誇りを抱いているからこそ、パーソナリティの方々は、リスナーに防府のまちなかを動いてもらうように楽しい話をしているのだと感じました。仕事をする上で重要なのは、知識や技術を持っていることよりも、その役割を理解した上で動くことができるか、という点なのかもしれないと考えるようになりました。

また、社会人の方々に囲まれて気づいたことは、私自身の対人能力・コミュニケーション能力の低さです。これに関して特に痛感した点は、どこまで挨拶・自己紹介をするべきなのかがわからないということです。例えば、社員の方の説明を受けている間に、初めてお会いする社長が会社に戻られた場合、説明を中断して行われる挨拶のなかでどれだけ自己紹介をしていいのかわからなくなってしまい、ほとんどできなかったということがありました。他にもゲストが来られた際、私は、他のパーソナリティの方々に合わせて「こんにちは」や「お疲れ様でした」しか挨拶しませんでした。社員さんはゲストの方に私のことを「K大学から職場体験に来ている〇〇さんです」と紹介してくださいました。考えてみれば小さな放送局に何度か訪れる人であれば、初めて会う社員はあまりいないでしょうから、私のことを疑問に思うはずですし、そこまでの自己紹介を自分からすべきであったと反省することが何度かありました。

現時点での自分と社会人の間にあるギャップが、今回のインターンシップを通して見えてきました。これからの学生生活の中で、少しでもこの差を埋められるように目的意識をもって活動していきたいと思っています。

人との出会いを大切にす

K大学：社会学部・社会学科・3年

期間：平成28年9月5日～9日（5日間）

私は今回、5日間放送局でインターンシップを体験させていただきました。私にとってテレビは、毎日見るかけがえのないもので、そのテレビが作られている放送局とは、どのような仕事をしているのか、小さい頃から興味があり、自分の適性を見極めることも含め、今回のインターンシップに応募しました。

インターンシップに参加する前は、放送局での仕事というのは、労働時間が長く、たくさんある職業の中でも過酷なものというイメージがありました。実際インターンシップに参加した5日間はあるという間で、毎日が知らないことと驚きの連続で、とても刺激的で勉強になった5日間でした。放送局の仕事は、番組制作とそれを放送する仕事しか知らなかったのですが、その他にも営業、編成や美術などの様々な仕事が存在していました。私たちが普段目に見えている仕事だけでなく、その他に多くの仕事があり、それらがあって初めて番組が成り立っており、自分が見ていたのは、テレビの一面にしか過ぎないのだと気付きました。1日目に、ドキュメンタリー番組を視聴し、その番組を実際に作った人と直接会って対話をしました。この体験では、その番組を作った制作の意図や、どのようにしてこの番組が作られていたのかを教えてくださいました。ドキュメンタリー番組を制作するにあたっては、様々な人に話を聞いて、インタビューを行います。人に話を聞くというのは自分の想像よりも遥かに大変で、難しいことであるのだと思いました。「そのことを本当に聞きたいんだ。」「テレビでこのことをきちんと伝えていきたいんだ。」というディレクターの姿勢があつてこそ、人は口を開いて話をしてくれる気になるのだということを知りました。テレビを作っていく上で人との関わりは欠かせないものであり、話を聞く態度や、人との関わり方などの、人間力を問われる仕事であるのだと感じました。特に放送局というのは様々な場所で、様々な人と関われる仕事であるので、多くの人の考え方や生活に触れることができます。なので、人との出会い、一期一会を大切にしていかなければならない職業であるのだと感じました。

放送局で働く人々は、番組やラジオの放送をするという免許を、国からもらってやらせてもらっているという姿勢で取り組んでおり、その姿勢がとても大切なのだと思いました。私はテレビが大好きなので自分の好きなものを仕事にするということに対する不安がありましたが、自分の好きなことや憧れを仕事にすることは、苦しいことでもありますが、それでもやはり、テレビが好きじゃないとできない仕事であり、みんな好きだからこそ、誇りを持って頑張ることができるのだと感じました。

今回のインターンシップで、放送局だけにかかわらず、働くというのは自分が思っているほど甘いものではなく、自分のやる仕事には常に責任が伴い、自己利益だけを追求しているのでは成り立たないものなのだと痛感させられました。